

崎津港は、いつものひっそりしてあたりの山影を映している。  
天草下島の西南、羊角湾の北側に深く入りこんだ天然の港である。

# ゆるやかな波

江戸期は崎津村で、古くは「佐志の津」(Sashinochi)と呼んだ。港の見える岬の突端を廻ると、崎津天主堂の尖塔を中心に、崎津中町の集落が低く軒を並べている。

新しい建物が無く、かつて栄えた二軒の旅館も、今は雨戸を閉ざしたまま古びている。  
戦前、崎津を訪れた作家の阿部知二は、「帆柱の屋根の群の上に、暗灰色の尖塔と、その上に十字架がみえた」と、  
「島影」に書いている。この集落の歴史は古い。  
一五六九年(永禄十二年)、ルイス・アルメイダは、

# しつとりとした島影。

この地に滞在してキリスト教を布教し、禁教時代を経て、明治初年に復活した。  
狭い集落に、禅宗と真宗の仏寺、神社、カトリック天主堂が、歴史の縮図を偲ばせる。天草島も急激に変貌しつつある。

# 歴史をしのばせる崎津港。

その中に、崎津の港は、古い天草の情調を漂わせている  
残りすくない集落である。

キリシタン文化研究会会員 濱名 志松

